

## 仮称「木造建築劇場研究会」の提案

九州地方の8月の集中豪雨で、創建74年の木造の劇場が大災害を受けて、全国芝居小屋会議や座長大会等予定の催しが出来なくなった。かつては炭鉱で一世を風靡した、福岡県飯塚市に生きつづける嘉穂劇場である。民間の個人所有の木造劇場では、日本で唯一の劇場である。それが、集中豪雨による床上1m以上の浸水に遭い、1階席の棧敷から花道・舞台の床・廻り舞台すべてが木造であるが故に、玩具箱をひっくり返したような状態になってしまった。

それを聞いた津川雅彦らを中心に、多くの芸能人がその復旧への協力を申し出て、近くの体育館でチャリティーイベント等、氣勢を上げた。地元では、周囲の商店街も同じように災害を受けながら、どうして嘉穂劇場のみが、そんな復興支援を受けるのか——、話題になっている。実は、その理由はまさに木造の劇場であるからなのである。一般によくある鉄筋コンクリートの劇場だとそんな運動は起こらなかったであろう。

というのは、木造だから愛着やなじみがしみ込んで、人との関係が出来るのである。特に、そこで身体的に関係する役者との関係は、単なる観客とは違って特別である。昔から木造の音楽堂は、そこで行われた音楽を記憶するとか、しばしば行われる催物に合った音や雰囲気になっていく、等と云われる。それは、木は有機材で生き物であるからである。私が想像するに、「木」はやわらかく、素材そのものにも、その組合わされた柄<sup>ほぞ</sup>や継手の接点にも、いつもよく似た力や振動が与えられると、段々それに素直に反応するようになじんできると考える。それが生きたやわらかい素材であるが故だと考える。

もともと日本の文化は木造空間の中で育ったのである。生活はもとより、人とのコミュニケーションや様々な芸能・祭事等、すべて木造の建築と都市空間で育ったのである。茶道はあの茶室空間と切り離せないし、能は能舞台、歌舞伎は花道のある芝居小屋の中で育った。従って日本の音楽は、残響と音の混合調和を大切にす西洋の音楽とは違って、木造空間にふさわしい、適当に吸音

のある空間で、それぞれの音が独立して明瞭に聴こえながら調和して聴けることが好ましい音の世界である。

私はこの嘉穂劇場で、和太鼓を聴いたことがある。普通なら、こんな小さな劇場で和太鼓をたたくと、耳をふさぎたくなるものである。しかし、それどころか力強い音の響きは建物全体が振動して、観客は身体そのもので楽しめるのである。

即ち木造建築は、最初に述べた生き物であるから、我々の身体と同様、共鳴しながら適当に吸音し、一緒に楽しむ我々観客に身体的に伝えてくれているのである。それによって、ホール空間全体がひとつの身体（世界）となって演者に反応し、ついに演者も含めて一体となった「一つの世界」、まさに生きた一つの身体空間が成立するのである。これが日本の劇場空間の醍醐味であるが、これを実現するのが、「木造建築の劇場」なのである。これを私は、やわらかい建築、やわらかい劇場と呼んでいる。

その原型が偶然生きつづけてきたのが、嘉穂劇場である。これを機会に全国に残る木造建築の劇場の調査と保存の研究会をつくり、具体的に嘉穂劇場への対応も考えて行きたいと思う。

2003. 9.

山崎 泰孝

近畿大学文芸学部教授

株式会社アズ・インスティテュート代表

〒606-8402

京都市左京区銀閣寺町 83-2

TEL・075-762-1377 FAX・075-762-1734

E-mail:yy@yamazakiyasutaka.co.jp

<http://www.yamazakiyasutaka.co.jp>